

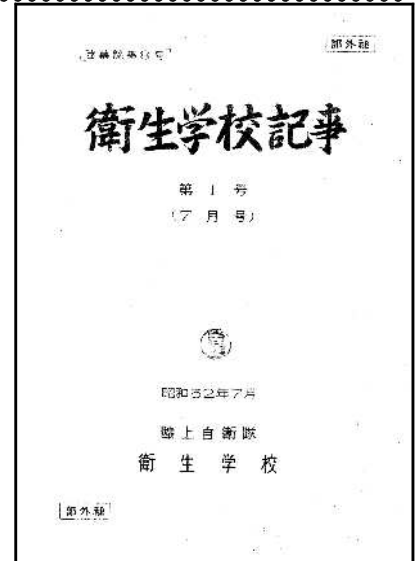
情報公開裁判の傍聴支援を！ 東京地裁103号法廷

岡田幸人裁判長（東京地裁民事51部） は自衛隊衛生学校関係者の虚偽証言を認めず、追加証人を採用すべきです！

◆私たちは 1957 年から 59 年に陸上自衛隊衛生学校が発行した『衛生学校記事』の情報公開を求めています。本裁判で国・防衛省側は廃棄され存在しないと嘘を述べて隠蔽を続けています。右の 1 号表紙の通り「陸幕認第 8 号 部外秘」と記された重要な行政文書です。しかも当時の衛生学校長金原節三氏（元陸軍省医務局、医事課長）が戦前の細菌戦部隊の復活を意図して特殊武器衛生活動を強化するために創刊した研究誌です。廃棄することは絶対にあり得ません。

◆国は、衛生学校図書室「図書原簿」の『衛生学校記事』に赤二重線が 2005 年 9 月に引かれているから廃棄が推測されると主張。しかし自衛官の証言は廃棄指示した上官が誰かとも言えないしどろもどろなもの。赤二重線は隠蔽工作で、情報公開請求後に引かれたものです！

◆また国は、金原元校長の遺族が 1977 年に衛生学校に寄贈した『衛生学校記事』89 冊は、「彰古館」に設立した「金原文庫」にあった（『金原節三先生資料目録』に記載）が、1995 年 3 月頃に金原文庫は廃止され『衛生学校記事』は行方不明と答弁。これも真っ赤な嘘です！



中央特殊武器防護隊は核戦争・生物化学戦争を担う大量虐殺部隊です

自衛隊は1950年代からすでにCBR戦準備を進めてきたが、2015年に成立した安保法制により、集団的自衛権を行使して米軍とともに公然と戦えるようになった。その米軍は核・生物・化学のいずれの兵器も実戦で使用できる態勢を維持している。日本の安全保障に関する基本文書には「核の傘」が常に書かれ、生物・化学兵器にも言及するようになった。米軍とともに戦う以上、核戦争・生物化学戦争に対応する準備を常にしていることは、陸上自衛隊化学学校等が作成し5年ごとに更新している教範類を見ても明らかである。日米共同訓練も実施されている。

しかし、核・生物・化学兵器は、攻撃の対象に敵国兵士と一般市民を区別することはない。市民を攻撃することは明白な国際人道法違反であるから、生物兵器禁止条約が成立し、化学兵器禁止条約が成立し、また核兵器禁止条約も成立した。

さらに2018年の国連「軍縮アジェンダ」は、国連が取り組むべき3つの「課題の核心」の最初に、核兵器・生物化学兵器など大量破壊兵器に対処する「人類を救う軍縮」を挙げている。このような国際的な動向のなかで、核戦争・生物化学戦争の準備をしていることは、人類に対する犯罪行為というほかはない。自衛隊の核戦争準備・生物化学戦争準備は、ただちに中止されるべきものである。また、過去・現在を問わず、自衛隊の核戦争準備・生物化学戦争準備に関するすべての文献は公開されるべきであると考えます。（大内要三氏「自衛隊のCBR戦準備と隠蔽体質についての意見書」甲618号証）

次回進行協議期日 2022年8月9日

次回口頭弁論期日 未定

2022・7・22

◆NPO法人731部隊・細菌戦資料センター（共同代表 近藤昭二・王選・奈須重雄）

NPO 法人 Website : <http://www.anti731saikinsen.net/>

連絡先：一瀬法律事務所：東京都港区西新橋 1-21-5 (Tel:03-3501-5558 Fax:03-3501-5565 / Email : info@ichinoselaw.com)

自衛隊の『衛生学校記事』隠蔽は、絶対に許されません！ 多数の市民の裁判傍聴で、国の情報秘匿を監視しましょう！

◆ 2021年12月20日、22年1月14・24日の3期日、被告国・衛生学校担当者5人に対する証人尋問が行われました。衛生学校図書室の「図書原簿」に赤二重線を引いたという鈴木武範証人が出廷しましたが、その証言は下の通り陳述書の内容も忘れた言うほど、まったくデタラメなものでした。

鈴木武範証人の証言は完全破綻！赤二重線は隠蔽工作だ！

鈴木武範証人は、陳述書(乙48)では上官から「衛生学校記事」等の廃棄を指示されたと述べていました。ところが法廷の証言で、その陳述書の内容すら覚えていないことが暴露されました。「それは、どういうきっかけで、その頃の日付で二重線を引くということになったんですか。

きっかけは、ちょっと覚えておりません。

覚えてないことないでしょう、自分の陳述書で言ってますよ。とぼけずに教えてください。まだ3年たってないですよ、陳述書を作って。

はい。

よく思い出して。どういうきっかけで、どういうことがあって、二重線を引くことになったのか、ちゃんと説明して。

陳述書に書いたのは、そうだったのではないかなと思って書いたんですが今になってちょっと思い出せないですので、覚えてないという感じです。」(鈴木調書12頁)

「具体的にあなたはこの上官から破棄を指示されたときの場面というのは今現在覚えているんですか。いえ…。

あなたの証言をずっと聞いていると、今この法廷に立っているときには、覚えていないというふうには証言されているのかな、というふうにししか思えないんですけども、そうですか。

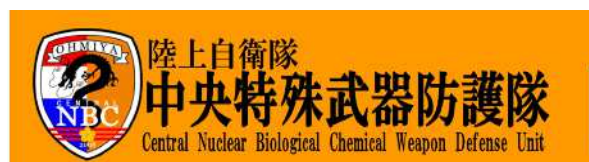
そうですね、今になって思うと、ちょっと覚えていません。」(鈴木調書34頁)

私たちは、新たに鈴木武範証人の上司の①藤澤俊光(2005年当時の図書班長兼教材班長)②永田正志郎(2005年9月当時の教材課長)③瀧間(2005年当時の教材課長)と同僚の古野巖(2005年当時の図書係)の4人の証人を追加申請しています。

◆また彰古館・金原文庫についても証人尋問が行われましたが、金原文庫が廃止された1995年に広報援護室に所属して彰古館の運営管理を担当した責任者は不明なまま。国側は、1995年には彰古館の担当者がいなかったことにして金原文庫の廃止の経緯、廃止に伴う史料の移転先などに関する真相を隠蔽しようと狙っています。

私たちは、新たに①小林速雄(1995年当時の総務課長)②石井繁(1995年当時の広報援護室長)③中村榮(1995年3月まで広報援護室に所属、彰古館の管理担当者)④斎藤尚武(1995年金原文庫廃止後に設置された国際貢献災害派遣センター長)⑤原剛(防衛研究所側で金原文庫史料の一部移管を受け入れた当時の担当者)の5人の証人を追加申請しています。

◆更に大内要三さん(軍事ジャーナリスト)が、本裁判のために『自衛隊のCBR戦準備と隠蔽体質についての意見書』を作成してくださり、この意見書を甲618として証拠提出しました。私たちは大内さんを含む10人の追加証人尋問を求めています。『衛生学校記事』の隠蔽は自衛隊の暴走に繋がっています(下記の写真参照)。皆様の本情報公開請求裁判へのご関心とご支援を心からお願い致します！！



対特殊武器衛生隊
NBC Countermeasure Medical Unit



(左)陸上自衛隊
中央特殊武器防
護隊
(右)陸上自衛隊
中央特殊武器衛
生隊
の各ホームペー
ジより



陰圧病室ユニット